Gundam BuildDivers
GBWC
GIMM & BALL's World Challenge

ガンダムビルドダイバーズ
ジムとボールの世界に挑戰！

GUNDAM BUILD DIVERS
GIMM & BALL'S WORLD CHALLENGE

GBNの世界に閉じ込められたジムとボールの戦いがスタートする!!

Episode 1

Episode 1-A

Are you gonna go my way
～自由への疾走～

インスツルメンツパネルの明度設定をスペースコンディションにおとした暗いコクピットに、どちらかといえば華奢な体を滑り込ませた彼は、手元も見ず慣れた様子でベイルアウト・シートと自分とをハーネスで固定しながら、TMS（ターゲット・マネージメント・システム）の表示に目をやった。ため息代わりの口笛がこぼれ出る。

「ご機嫌な座標だ」

「行けるか……ヨシ？」

ラジオ（無線）からコマンダーが気遣い問う。本心では寝ぼけヅラの目ヤニほども心配していないくせに。思わず「はんっ」と鼻で笑ってしまう。

「行けるかもなにも、どうせご指名なんだろ？」

返事の代わりにジジッとジッパーコマンドが返って来た。「その通り」の意味だ、毎度のこと。

ジェネレータの鼓動が太く重く、力強く頼もしい響きとなって尻の底をくすぐりはじめた。

時間はない、事は一分一秒を争う。

「行くさ、どこへだって……」

両足をスラスト・ペダルに乗せ、コントロール・グリップに左右の手をそえる。親指でトリムタブを微調整しつつ、彼は、開放しはじめたカタパルト・ハッチの先の、星の海から差し込む遠い一点の輝きを見据えた。

「たとえそれが地獄の果てだろうと、俺は……たどりついてみせる……」

＊

「よっしゃぁぁぁぁぁーっ！」

GBNのセンターロビーに、ジムとボールの歓喜の絶叫が響いた。千姿万態なアバター・コスに身を包んだダイバーたちが、ミッション・エントリー・カウンターで両腕ガッツポーズの拳を握る二人に、いっせいに視線を向ける。

全世界にフェイク・ガンプラをはびこらせようと目論む、ワールドワイド闇金型マフィアの戦慄走る陰謀により、GBNの世界に閉じ込められてしまったジムとボール（詳しくはエピソード0を参照）。二人は、片やフィアンセに鼻面押さえられ今まで作ることができなかったリアル彼女を必ずやゲットするため、片や超推しアイドルのプレミア・ライヴでケミカルブラックライトを思い切りぶん回すため、なにがなんでもこのGBNからログアウトすべく、謎の輝きの中で告げられた声にすがり、現実世界へと戻るキーだと言う『黄金のポリキャップ（ゴールデン・ポリキャップ）』を手に入れようとしていた。

しかしそのポリキャップは、GBNのどこかに存在するとされる『レジェンド・ガンプラ』が持っているらしい。手に入れるには、まずは、くだんのガンプラにバトルを挑まねば。いやいやいやそれ以前に、そもそもいったいどこに行けば出会えるのか。

と、いうわけで二人は、とにもかくにも、とりもあえずも、駄目でもともと『レジェンド・ガンプラにレッツチャレンジ！』的なミッションはないものかと、GBNセンターロビーのミッション・エントリー・カウンターを訪れ、

「いいじゃんいいじゃん！　オレたちと一緒にLGBP（レジェンド・ガンプラ・バトル・パーリィ）しちゃえばいいじゃん！」と、先のお告げの主が誰なのかという疑問もよそに、相変わらずの様子でカウンター・アテンダントに声をかけるジムの隣で、レコードショップのジャケ漁りよろしくミッションカタログを検索していたボールが、

「ねえねえジムジム！」

「……んだよ、あとひと押しなんだから邪魔すんなよっつーか、そもそも考えてみりゃ『レジェンド・ガンプラにレッツチャレンジ！』なんつー安易なミッション、ハナからあるわけないよねー。こういうのは、自分たちの足を棒にしてマメ作って苦労しながら探し訪ねるからありがたみっていうものが――」

「いやいやいや！　ちょ、ちょ、ちょ！　これ！　これ！　これ！」

と、ジムの首根っこを掴み、掘り当てたミッション・インフォを見せれば、『ゴールデン・ポリキャップ、袋詰め放題ミッション』

「……」

事態を飲み込むのに、暫く時間を必要としたのち、

「よっしゃぁぁぁぁぁーっ！」

と、冒頭のシーンと相成ったわけである。

「んだよ！　レジェンド無用じゃん！　ゴールデン・ポリキャップ単品で手に入るんじゃん！」

両手ガッツポーズの拳を握りしめつつ、ジムは、先ほどのありがたみ云々発言も木っ端みじんと驚喜し、ボールは、もはや呆れ気味に天を仰いで、

「単品どころか袋つめ放題！　っていうか、どんなミッションだっちゅーの！」

＊

そのアトラクションは、極東の島国に古くから伝わるトラディショナルなアミューズメントだと、ジムはボールから教わった。

「あと、君が……ジム・タービュレンスがいま持ってる、それ……」

ポリポッドボールからの交信に、コクピットのジムは、タービュレンスの右手が握っている『それ』を見下ろして、

「テニスラケットみたいなのに、ガットじゃなくてうっすいペーパー張った……これ？」

「うん、そいつの名前は……『ポイ』」

「ポイ……」

ワイワイと歓声にぎやかに戯れるダイバーやガンプラたちのなか、全高18メートル弱のジム・タービュレンスが手にしているポイの捕獲面は、直径にして一メートルほどだろうか、そこにペーパーを貼り、プールほどもある大きさの水槽にぷかぷか浮かぶ全長一〇センチ程度の黄金色のポリキャップをすくっていくという一見楽勝なミッション、しかし、

「ペーパーの厚みもタービュレンスとおなじく、MGスケール換算で分厚くなってればな」

「こういった狡猾さも、トラディショナルなスパイスだってグランマが言ってた。あ、それと、本来ポイですくうのは、ゴールド・フィッシュなんだって」

そう言うボールの口調は一周めぐって、なんだか清々しい。

「ガンプラアミューズメントだけに、ゴールド・フィッシュに代わって、ゴールデン・ポリキャップですか、そうですか……」

結局、すくったぶんだけ袋に詰め放題どころか、たった一個のゴールデン・ポリキャップすらゲットすることも出来ないまま、二人は、代金代わりのフォースポイントを使い尽くしてしまった。いや、たとえそれを手にしていたとしても――見れば、水槽の水面に剥がれたゴールド塗料がゆらゆら浮かんでいる。

「あーこれならオレも知ってる、アレだよ、紫色のスプレーで着色した、ヒヨコ……」

二人は、今更ながらガックリうなだれた。

ガンプラバトルがメインではないからだろうか、あるいは、まるでのどかな移動遊園地を思わせるのが理由か、このアミューズメント・パーク・ディ

機体紹介 1

⬇右腕にはベース機体から引き継いだ二連装ビーム・ライフルがマウントされている。威力もさることながら、正確な射撃が可能。

⬆➡頭部センサーは改良され、より情報を瞬時に分析できる仕様に。また、ビーム・サーベルがマウントされている背部のバックパックは大出力で、宇宙空間でも優れた機動性を発揮した。左腕部にもこちらもベース機から引き継いだボックスタイプビーム・サーベルを装備している。

ジム・タービュレンス

ティム・バレット（ジム）が、父が大切に保管していたガンプラ「ジム・ドミナンス」をベースに改良を加えた機体。名称にある「タービュレンス」は乱気流や動乱、といった意味を持つ。ベース・キットから各所を大幅にブラッシュアップされているが、中でもバックパックは大型のものに換装され、機動性が飛躍的に向上している。また、頭部にも改良型のセンサーが装備され、より正確な射撃やスムーズな索敵が可能となった。機体のカラーリングはミリタリーカラーに変更された。

GUNDAM BUILD DIVERS GIMM & BALL'S WORLD CHALLENGE

Episode 1-A

レジェンド・ガンプラ探し出さなきゃ、僕たちずっと、このGBNからログアウトできないよ

いいじゃんいいじゃん！オレたちと一緒にLGBP（レジェンド・ガンプラ・バトル・パーリィ）しちゃえばいいじゃん！

メンションには、心なしか子供たちの（姿をした）ダイバーが多い気がする。ゴールデン・ポリキャップ（偽）すくいのほかにも、ピンバイス射的に多色成形機メリー・ゴー・ラウンドなどなど、どこか懐かしげなアトラクションたちに加え、フードの屋台も数件、軒を連ねていた。

「ガンプラバトルでじゃなくて、アトラクションやったりフード売ったりしてフォースポイント貯めてるダイバーもいるんだね」

「ここだけのルールらしいし」

そのため、このディメンションでは特別に、ダイバーたちの空腹パラメータまでもが設定されていた。

「つーか、すくえるすくえる詐欺に遭うまえに頼んどいたケータリング、まだ来ないんですケド」

不機嫌を垂れるジムに、ボールも「そういえば」と思い出した。

「だから屋台のフードにしようって言ったじゃん」

「オレ、なにげに外で料理した食べ物って受けつけない系」

それでもボールは、「なんかあるだろ？」と、ジムでも受けつけられそう系な屋台を探そうと辺りを見回して――ふと、

「……あのさ」

と、気づいた。

「僕らがGBNにログインしてからいままでに遭ったガンプラ、全部、MGだったかも。ほら、このディメンションにいるのも」

「え？　そう？」

気づかなかったとジムも、あちらこちらでアトラクションに挑んでいるガンプラに目をやるが、

「……んなの、でっかくなったら、グレードなんて区別つかなくない？」

「つくって、素体本来の造形が全然ちがうもん。MGはディテールリアルだし、もともとの可動域広いし、合体とか変形のギミックだって細かく再現されてるし」

確かにGBNには、グレードを限定したサーバやディメンションがあるとは聞いたことがあった、けれど……果たして、偶然そのサーバにログインすることになったのか……それとも……。

「んなことより、問題はさ」

そう、なにはともあれ二人は振り出しに戻ってしまったのだ。とにかくいまは本物のゴールデン・ポリキャップを手に入れねば。そのためには、やはり――

CHARACTER キャラクター紹介

ボール（アズマ・カール・トンプソン）

ポリポッドボールの製作者で、髪が赤い方。パリピなジムに合わせられる柔軟さと懐の広さはあるものの、どこか流されがち。GBNにログインしてから、MGスケールのガンプラばかりに遭遇していることに気づくなど、勘の良さには定評がある。

■機体紹介

ボール

ポリポッドボール

ジム（ティム・パレット）

ジム・タービュレンスの製作者で、髪の黄色い方。性格はお調子者で、困難が訪れてもわりとポジティブに乗り切ろうとする一面がある。そんな性格なので、パーリィが大好き。パーティーではなく、パーリィであるところにコダワリがあるとか、ないとか。意外と繊細なので、屋台の料理は受け付けない系。

■機体紹介

ジム・ドミナンス

ジム・タービュレンス

Episode 1-A お待たせしました！おいしさと宇宙をまごころでつなぐ、ケータリングの三木亭です！

「レジェンド・ガンプラ探し出さなきゃ、僕たちずっと、このGBNからログアウトできないよ」

「だからどこにいんだよ、そのレジェンド様は？　全部のサーバの全部のディメンションでシラミ全匹潰す気か？　そんな手間、一生ここから出られないのとおんなじじゃね？」

「んなこと言ったってしょーがないじゃん、ってか、自分の足棒にしてマメ作って苦労しながら探し訪ねないとありがたみがーとか言ってたのそっちじゃ――」

交信ウィンドウに映るジムに食ってかかろうとしたボールは、ふと、機体の傍らに、一人の少女が立っているのに気づいた。

見た目の年頃は高校生くらいだろうか、肩に掛かるほどの髪をうしろにひとつ結び、はっきりと開いた大きな瞳を強くこちらに向けて、なにやら叫んでいる。

「……？」

確か外部マイクがあった気もするが……スイッチを探すのももどかしいと背後ハッチを開け、機外へと降りるボールを、歩み来た少女が待ち受ける。

「何か用？」とたずねようとするより先に、彼女が告げた。

「あなたたちが求めるものは……もうすぐ、やって来る」

「？」

そんな二人の様子をいぶかしげに見下ろしていたジムのコクピットに突如、けたたましいアラームが鳴り響いた。

「接近警報……真上から!?」

ハッチが開けはなれたままのコクピットより漏れ聞こえたジムからの交信に、ボールも上空を見上げる。

両者の視線の先に輝く光点がひとつ、昼間の星のごとく確認されたかと思った次の瞬間、その光はみるみるうちに大きくなり、次第に姿をあらわにし――

「……スペースクラフト？　宇宙から大気圏へ突入してきた!?」

おもわず洩らし言うボールたちに迫りつつ、まるで魔法のようにその姿を巨大な人型に変形させた。

「ガンプラ!?」

ジムは驚き、ボールはコクピットに戻るのも忘れて息を呑んだ。

「ゼータガンダム！」

現れたゼータガンダムは、更に距離をつめると、ジム・タービュレンスとポリポッドボールの目前の地に、制動をかけつつランディングした。衝撃を受け止めた膝がわずかに屈伸したのち背筋を伸ばして仁王立つ。グッと張った胸部のハッチが開き、コクピット内からその青年は、バスケット片手に、どちらかといえば華奢な姿を表した。

「お待たせしました！　おいしさと宇宙をまごころでつなぐ、ケータリングの三木亭です！」

Episode 1-B

Heart of Glass ～割れたこころ～

「あー、マズいな」

「うん、マズいね」

思わず声に出したくなる不味さ、それが三木亭の味、

――なわけないでしょ

立ち食いカウンターほどの高さで固定したポリポッドボールのマニピュレータアームをテーブル代わりに、器用な箸使いで蕎麦を口に押し込んでいる（すするのは苦手）ジムとボールに向かって、少女は、うしろでひとつにしている髪を結び直しながら、ぼそりと一瞥を向けた。どうやら彼女は、ジムがオーダーしたジャパニーズ・蕎麦ヌードル・ケータリングショップの関係者だったらしい。

「あのさ……」

ジムは、ボールがザルの上で水分を失い鳥の巣のようにかたまりなっている麺を必死にほどこうとしている隣で、進まない箸を投げ置いた。

見れば、蕎麦を運んできた青年が、傍らに起立駐機しているゼータガンダムの足もとで、うつわがあくのを待っている。

「そうやって待たれると思いっきし食いづらいんだけど」

「ただでさえ食べにくいんだから」

とうとうボールは、蕎麦ちょこの中身をドボドボふりかけ、蕎麦をほぐしながら、

「終わったら呼ぶって」

「衛星軌道上の店まで帰ってまた戻るの、面倒なもんで」

青年はせかすように告げた、なにやらそわそわしている。

「使い捨て容器とかにすりゃいいじゃん」

Episode 1-B どこへでも迅速にケータリングが出来る、究極の……蕎麦の出前専用ガンプラを目指して

Episode 1-B さっきまでそこに、ケータリングのレジェンド……だった男が

「本格志向だから、ウチは」
少女がジムに答えた。
「つーか」ジムは、箸で絡まった蕎麦をもてあそびながら「なぜに宇宙に店を出す。そんなの蕎麦ノビて当然じゃん」
「当然じゃないけど」
ふと少女は、青年に目をやった。
「前は、ノビることなんて、なかったけど」
青年は視線を返さない。
なんだかぎこちなく居心地の悪い苦手な空気。「なぜこんな店を選んだ？」ボールが訴えるように睨む、「GBNでケータリングなんてここしかなかったんだってば」ジムが言葉にせず答える。
「残せば、食べないんだったら」
向けられた無表情な声に、二人は思わず揃って少女を見た。
「ただし、代金のフォースポイントはちゃんともらうけど」
「もちろんもちろん！」「注文したら払う、それ資本主義のキホン！」
淀んだ水中からようやくプハッと顔を出したように、ジムとボールは表情を安堵させた。店員の監視の手前、無理矢理にでも完食しなきゃとプレッシャーだったが……もともとこっちはこんなボソボソくそマズヌードルにつきあってるヒマなんてない、GBNからログアウトするために一刻も早くレジェンド・ガンプラを見つけ出して、ゴールデン・ポリキャップを手に入れなきゃなんないんだ。そのためだったらフォースポイントなんぞ、なんなら勘定の一〇倍、一〇〇倍、一〇〇〇倍だろうと耳を揃えて——と心の中で言いかけて、二人は「あ！」と思い出した。ゴールデン・ポリキャップ（偽）すくいの代金に、フォースポイントをすべてつぎこんでしまっていたことを。

*

少女はダイバー名を『セリカ』といった。青年の方は『ヨシ』。店名の三木亭は、ヨシのリアル世界の名前からとったものらしい。蕎麦の調理とケータリングを彼が、その他の店の切り盛りはすべて彼女が担っている。ゆえにヨシはセリカのことを『コマンダー（司令官）』と呼んだ。ちなみにさきほどジムとボールがいたアミューズメント・ディメンションにも、新規営業開拓に訪れていたそうだ——厨房の洗い場で、セリカからそこまで聞く間に、ジムとボールは6つのどんぶりを割った。セリカは、こめかみに血管を浮きあがらせながら、
「前まではフォースのメンバーもそこそこいたから……ヨシと私の二人だけになった今じゃ、コマンダーどころかリーダー（小隊長）以下よ」
自嘲し言い捨てる。
「二人だけ？」ボールは、汚れたまま山になっている食器を納得の様子で見据え「そりゃ、洗い物も追いつかないよね」
軌道衛星上に浮かぶヨシとセリカのフォースネスト——宇宙ステーションを改装した店は、ケータリング専門らしく、客席はなかった。厨房とガンプラのハンガー（駐機庫）とカタパルト。奥には居住スペースや事務スペースもあるようだが、離れた延し台で蕎麦を打っているヨシ以外、確かに人の気配はない。
「ほかのみんな辞めたの？　なんで？　ヨシの蕎麦がノビノビでちょー恥ずかしいから？　それともヨシがノビノビ男爵だから？」
「だから言ったでしょ」
セリカは、泡だらけのシンクに落としたスポンジを探しながら聞くジムに、カットソーの袖をまくって手を貸し、
「前は、どんなに配達が困難な場所から注文が来たって……どんなに遠くまで届けたって、蕎麦がノビることなんて絶対になかった……けっして、ノビノビ男爵なんかじゃ……」
ふと、蕎麦を打つ音が止んだ。
ヨシの背中が、そっと逃げるように厨房から出ていく。
「あの日までは……」
セリカは彼を見ずに聞こえない声で呟いた。
おいおい、またなんだかおかしな空気が戻ってきたぞと、ジムがボールの方を向くと、同じタイミングでボールも、
「確かに、彼女が言ってるとおりなのかも」
と、ジムの方を向いた。
「……は？」
「あ、うん、あのノビノビ男爵のガンプラ——ヨシって人のゼータガンダム、宇宙から降下してきた時の大気圏突入用ウェイブライダー形態も、ゼータプラスの大気圏内高速機動用ウィングバインダーを装備させたVG可変翼装備の大気圏内高速機動形態も、見事な造り込みだった。しかもそれだけじゃない。フライングアーマーをパージして、ウィングバインダーに空中換装するギミックも、びっくりするくらいスムーズだった。きっと思いっきし気合入れて組み上げたんだと思う、宇宙でも大気圏内でも、どこへでも迅速にケータリングが出来る、究極の……蕎麦の出前専用ガンプラを目指して」

Episode 1-B ジム・タービュレンス、冷やしおろし！ポリポッドボール、たぬきわかめ！発進します！

「いやいやいや出前専門って——」
「よくわかったね」
ぼそりとセリカが洩らした。
「そうなの!?」
見ればセリカは、ジムのスポンジを探す手伝いの手を止め、シンクの泡の先に遠い時間を見つめている。
「ヨシの愛機『ゼータキュアノス』……がむしゃらだった頃の、あの人の……出前に懸ける想いの、分身……」
「そ、それよりさ、聞いていい？」この空気はもういたたまれない、ジムは話題を変えようと「オレら、探してる奴がいるんだけど」
ボールも「そうそう、そうだった！」と思い出し、
「君、知らない？　レジェンド・ガンプラって」
「レジェンド……？」
セリカは刹那、思案して、
「……なら、いたじゃない」
「え！　マジ!?」
「どこに？」
食いかかると、彼女は皮肉まじりに、
「さっきまでそこに、ケータリングのレジェンド……だった男が」
また蒸し返すか——ガックリとうな垂れたジムの手が思わず寄りかかったのは、洗い終わり積んであったどんぶりだった。慌て支えようとしたボールが足を滑らせる。
割れたどんぶりの数はいっきに二桁に突入した。もはや無傷のどんぶりを数えた方が早かった。
セリカの目がコマンダーの凄みを戻した。

*

「ジム・タービュレンス、冷やしおろし！　ポリポッドボール、たぬきわかめ！　発進します！」
コマンダー・セリカの大目玉の辞令により、どんぶり洗いからケータリング担当に転属となったジムとボールは、払えなかった蕎麦の代金がわりの苦役を一刻も早く終わらせるべく、カタパルトを蹴り、星の海原をめざした——その気配が、ビリビリ震える振動となってステーションのシャフトを伝わりハンガーにいるヨシに届いた。
しかし彼は気にもとめなかった。二人が自分の代わりに行ってくれるなら

⬇設置された4本の脚を杭とすることで、惑星の表面やビルの外壁に機体を留めることが可能となった。ゼータキュアノスとの戦闘でも、そうした特性は発揮されることに。

⬇後方からの砲撃支援を得意とするポリポッドボールの主兵装は、頭頂部に装備された180mm低反動キャノン砲である。

ボールにコダワリ続け、ついにはログイン名も（偶発的ではあるが）ボールとしてしまったカールことボールの愛機。宇宙用であった支援ポッド・ボールに4本の脚部を増強することで、より汎用性の高い機体へと仕上がっている。カラーリングも変更され、より戦闘兵器としての側面を強めている。とはいえ接近戦には難があるため、ジム・タービュレンスとの連携が必須。

Episode 1-B ログアウト……なんか、もうしなくていっか!

ありがたい。その間、『それ』に魅せられていられる――彼は、背後からセリカが見つめていることにも気づかなかった。

ヨシは変わってしまった。以前なら、ケータリングを人にまかせるなんて考えられなかったのに。あの日突然、天から降り注いできたまばゆい輝きに包まれてから……。

セリカは寂しげに深く瞬きすると、ケータリングスーツ用ロッカーの扉にそっとメモをはさみ、ハンガーをあとにした。

＊

ケータリングを終え帰路を進むポリポッドボールの行く手に三木亭が見えてくると、ボールは、鰹と昆布の合わせだしの香りが残るコクピットで大きく溜め息をついた。傍らには割れたどんぶり。

「洗って割って、出前で割って……これじゃ、蕎麦代返すどころか、働けば働くほど借金倍増するだけじゃん……」

嘆きつつ、なにかに気づいた、「?」と目をこらす。

三木亭の前で、ジム・タービュレンスが、なにやら帰りづらそうにしている。

ボールは回線を開いて、

「なに？　ジムもどんぶり割っちゃった的な?」

「違うし」

無愛想な声が返ってきた。

「じゃ、なんで戻んないの?」

「戻んねぇんじゃねぇの。戻れねーの」

辛味大根の香りが残るジム・タービュレンスのコクピットで、ジムは不機嫌ヅラを満面にしている。

「冷やしおろし蕎麦の出前先でさ、駄目もとで聞いてみたんだよ、レジェンド・ガンプラのこと、知らねぇかってさ」

「あ、それ、僕も聞いた、無駄だったけど」

この様子なら、ジムも同様だったのだろう、

「いいや、その客、それっぽいの知ってるって――」

ボールは「!」と身を前のめりにした。

「そう言うんだよ、不思議なガンプラがいるって、蕎麦代タダにしてくれたら詳しい居場所、教えてやるって。んなの当然オッケーに決まってるじゃん。で、言われた奴んトコ行ってみたら――」

「いた?」

「いた、ガンプーラが」

ボールは、前のめりにせり出してた頭を大きくガックリとうなだれた。

「……まぁある意味、不思議ではあるかも……」

「不思議っていわないんだよ、ああいうのは、変っていうんだよ。で、急いでその客んとこ戻ったけどもうアウト・オブ・パーリィ……あとの祭り、バックレたあと」

洗い物のどんぶりを二桁割った二人をとがめるセリカの剣幕といえば、それはもう凄まじいものだった。ジムでいえば幼いころ、愛犬ジャニスの毛をワイン色に染めようと、父親が大切にとっておいた一九九〇年ものブルゴーニュをカラにしたときの憤激に、ボールでいえば同じく幼いころ、最年長の姉の勝負ブラを、急流川下りのいかだの旗に拝借したときの憤怒にそれぞれ匹敵した。となると、もし「ケータリングの代金を受け取ってこなかった」なんて聞いたら、それこそ彼女は、もはや激昂で憤死してしまうのではなかろうか。

＊

「……は?」

ジムとボールは思わず、間抜けな声を揃えた。

エプロン（駐機スペース）へ帰還し、オペラ座の最上階から飛び降りる覚悟で失態をカミングアウトした二人を、しかしセリカは、それまでとは打って変わった穏やかな微笑みで迎えた。

それどころか、

「お願い、私を……さらって……」

大きな瞳のなかで黒目がうっすら潤んでいる。うしろにひとつ結んでいた肩までの髪をほどけば、ふんわり柔らかくウェーブが残って――そっか、セリカって、こんなにかわいかったんだ。

＊

どれだけの時間『それ』に魅せられていただろう。カタパルトの振動が再びハンガーまで伝わって、ヨシはようやく我に返った。次の注文が入ったのだろうか？　誰が蕎麦を調理したのだろう？　きっとセリカがうまくやってくれたに違いない、そうだ、彼女にまかせておけば、なんだって――

「そういえば」

ヨシは、セリカの気配がないのに気づくのと同時に、ケータリングスーツ用ロッカーの扉にメモが挟んであるのを見つけた。

＊

Episode 1-B ヨシの、ゼータキュアノスが……来る!

そこへ行きたいと言いだしたのはセリカだった。戦場となり廃棄されたコロニー、戦火に焼かれたその都市は、廃墟マニアダイバーたちの間で最近人気急上昇中のディメンションなのだという。

しかしジムとボールは、「どうしてこんなところに?」と聞くのも忘れていた、なぜなら、

「あの店を？　僕らと?」

「そう、あなたたちと私の、三人で」

ついさっきまでポリポッドボールのコクピットを満たしていた合わせだしの香りに代わって、いまは甘く爽やかな柑橘系がボールの鼻をくすぐっている。日ごろ空気のように嗅いでいる姉妹のものとは別物のかぐわしさ、ボールは鼓動が拳で強く胸を打つのを感じつつ、

「三人って……じゃ、ヨシさんは?」

「あの人の名前は、聞きたくない」

「でも――」

一人ジム・タービュレンスのコクピットに搭乗しているジムも、『セリカがどっちのガンプラに同乗するかじゃんけん』に敗北した悔しさを忘れて、

「なんで?」

「理由がなきゃ、一緒にいたいと思っちゃ駄目?」

「いや、その、あの……つーか、オレらまだ、会ったばっかだし」

「女子にこれ以上、言わせる気?」

けれど二人には、やらねばならないことがあった。レジェンド・ガンプラを見つけ、ゴールデン・ポリキャップを手に入れて、一刻も早くこのＧＢＮから――

「ログアウト……なんか、もうしなくていっか!」

ジムは言い放った。

「セリカちゃんみたいなかわいい子と一緒にいられんならもう、ずっとＧＢＮのままでいいんじゃね!?」

「だね!」

ボールも一点の曇りもなしと賛同する。

「よくよく考えてみたら現実世界なんていいことほっとんどないし！　右見ても左見てもドコ見ても人見下したり哀れんだりムカツク奴とかイライラする奴ばっかだし!」

「歩きスマホで横断歩道渡ってたらいつの間にか赤信号になってクラクション鳴らされたりするしな!」

「家は狭いし母親うるさいし姉妹はいつもパンツ丸出しでありがたみないし!」

「おまけに夏は暑いし!」

「冬は寒いし!」

「現実世界なんて超ビッチじゃね!」

「ＧＢＮばんざーい!」

その時だった。ジム・タービュレンスとポリポッドボールの目の前に建っていた三階建てほどの雑居ビルが、遙か上空からのエネルギー指向兵器の一矢を受け、一瞬にして消失した。

遅れて接近警報、ハッと天を見上げる。

陽を背後に鋭いシルエットが向かって来る。この機影、ガンプラじゃない!?

「ＵＡＦ（無人航空戦闘機）？　……違う、アレって……」ボールは頭のなかのトリセツを検索し「リ・ガズィのＢＷＳ（バック・ウェポン・システム）？　……でも、なんかヘン!」

「ＰＢＷＳ（プロトタイプ・バック・ウェポン・システム）!」

叫んだのはセリカだ。

反射的にジム・タービュレンスがライフルを向ける。しかしＰＢＷＳは、その照準線を凄まじく複雑なロール機動で翻弄しつつ、ビームスマートガンの威嚇連射を放つと、たちあがった爆炎の中を貫き、次の瞬間、ハイレート・クライム（急上昇）で、あっという間に姿を消した。それはほんの数秒、ジムは瞬きを忘れ、

「つーか早ぇえって!」

「なんだよ！　いまの!?」

息を呑むボールの傍らで、セリカが告げる。

「ヨシの、ゼータキュアノスが……来る!」

「!?」

ジムとボールは上空に目をこらした。

機体は姿を見せない。

代わりにガードチャンネル（緊急周波数）が開き、声が届いた。

「セリカを誘拐するつもりで俺たちに近づいてきたなんて……許さない……!」

見れば彼女が、小さな舌をペロリと出している。

ジムとボールは、交信ウィンドウ越しに、驚きの顔を向け合った。

Episode 1-C

Wish You Were Here
～あなたがそばにいて欲しい～

「ボクたちが、セリカちゃんを誘拐？」
接近警報がやまないそれぞれのコクピットで、ボールは目を丸くし、ジムはやれやれと肩をすくめた。
「あいつ、なんか勘違いしてない？」
セリカは慌てて出した舌を引っ込めた。
勘違いではない。なぜなら彼女は、ハンガーで『それ』に魅せられているヨシに背中を向けた去り際、ケータリングスーツのロッカーに挟んだメモにこう記していたのだ『セリカは預かった。返して欲しければ、代わりにお前の店を我々に寄こせ　～ソバ代を払えなかった二人より～』
「三木亭は渡さない……そして、セリカも渡さない！」
ヨシの強い声がポリポッドボールのコクピットに届く。ボールと同乗しているセリカは、パッと嬉しそうに微笑んだ。
シンプルな賭けだった。ヨシが自分を取り戻そうとしてくれるかどうか、自分の方を見てくれるかどうか。
そして、彼は来てくれた。
セリカはボールとジムに、一抹の申し訳なさを添えてすべてを打ち明けようとした「ごめんなさい。ぜんぶ、彼の気持ちを……私への想いを確かめるためのお芝居だったの……」
しかし、少しばかり遅かった。
「ずわんぬぅぇ～ん（残念）！」
ジムの心はすでに勝ち誇ってしまっている。
「なに勘違いしてんのかわかんないけど、あの店を一緒にやろうって誘ってきたのは、セリカちゃんの方なんで～す！」
「彼女はもうボクたちにぞっこん夢中なんだ！」
ボールが続く、威勢良く、
「あんたはとっくに用無しなんだよ！　ね！　セリカちゃん！」
「へ？　あ、いや、あの……」
ジムとボールに、一緒にヨシの店を乗っ取らないかと持ちかけた気持ちは、あながちすべてが嘘ではない。しかしそれは、もしこんな状況になっても、ヨシが『それ』に魅せられたまま迎えに来なかった時の腹いせ――何にせよ、どうやら二人に告げるのは勇み足すぎた。
「大丈夫、オレらがぜって―あいつから、あの店奪い取ってみせるから、あんな蕎麦屋更地にして、ご機嫌なパーリィショップに改装してあげるから！」
そんなのお願いしてないからって言うかパーリィショップってなんじゃい！
「ジムの言うとおり！　だから心配しないでセリカちゃん……いいや、セリカ！」
ボールは、生まれて初めて姉妹以外の異性を呼び捨てにした。見つめる眼が前のめりに血走り見開いている。もはや彼女は、種明かしするタイミングを完全に失ってしまっていた。
その時、遙か上空で、なにかが一瞬、陽に反射し米粒ほどに輝いた。
ポリポッドボールの隣で天にビーム・ライフルを向けていたジム・タービュレンスが、狙いを定め発砲を開始する、連射。
しかしその輝きは、ライフルからのビーム軌跡を強引にねじ伏せるようにかわしつつ、凄まじい速度で接近し、次第に機影を露わにし――
「さっき攻撃してきたヤツじゃねぇ！」
ジムはいったんトリガーから指を離し、目を凝らした。
ボールが頭の中のエア・トリセツを検索する、しかし、
「大気圏突入用ウェイブライダー……じゃない、大気圏内機動用のウェイブシューターに変形した？　……でもない！」
「あの機体は――！」
セリカは思わず息を飲んだ、
「ヨシが、最も配達が困難な出前先に向かう時に使う……『ウェイブダイバー』！」
それは、ウェイブライダーのフライングアーマーとウェイブシューターのウィングバインダーとを同時に装備した、大出力重攻撃強襲形態。
そのコクピットでヨシは、眼下に狙いを定めたポリポッドボールとジム・タービュレンスに目を据えながら、戸惑いに思案を巡らせていた。
「セリカが、あの二人を誘った？　……それは……本当なのか……」
一方で、ぐんぐん迫ってくるウェイブダイバーから狙いを向けられているジムとボールは、しかし、余裕をみせている。
「こっちにはセリカがいる！」
ボールがニヤリと言い、
「しかも、ジム・タービュレンスとポリポッドボールのどっちに乗ってるかはわかんねぇし！」
ジムはまるで悪役面を浮かべた。
「やつは、オレらにクリティカルヒットを食らわせらんねぇ！」
次の瞬間、ヨシのウィングダイバーが放ったビーム・ライフルの攻撃は、確かに両機を直撃しかなったが、それでも間一髪、ジム・タービュレンスの脚を撃ち抜くところだった。足元の地面が大きくえぐられる。
ボールとセリカが思わず大きく息を呑む。ジムは、上空を飛び抜け離脱するウィングダイバーに向け、背後からライフルを放った。しかしウィングダイバーは、まるでそのビームを引きちぎるかのように凄まじい速度で離れ去る、ヒットしない。
ヨシの声が届く。
「確かに致命弾は与えられない、だが、脚部を撃ち抜けば、地を這うしか出来ないお前たちのガンプラは、身動きがとれなくなる！」
しかしジムは「はんっ！」と大きく鼻で笑うと、
「なら、そっちも身動きとれなくしてやんよ！」
ジム・タービュレンスが急いで場を移動する――ビルとビルの谷間へ。そのあとをポリポッドボールが、多脚をワシャワシャと忙しなく動かしながらついてくる。
「なるほどね！　ここならウィングダイバーの機動はめいっぱい制限される！」
「確かに――」言いつつ、彼方遠くで反転したヨシが、ビルとビルの間を抜けて、一直線に向かってくる。ジムとボールが狙いを定めようとしたその時、
「ウィングダイバーならな！」
まさにマジックの如く、ウィングダイバーは一瞬にしてモビルスーツ形態――ゼータキュアノスに変形した。ボールは思わず目を丸くして、
「よっぽど精度高く造り込んだガンプラじゃなきゃ、あんなにスムーズな変形ギミック、再現できない！」
一瞬身動きを忘れたポリポッドボールを見逃さず、ゼータキュアノスはビーム・サーベルを抜き、斬りかかった。
我に返ったボールが、とっさに機体を後方にスウェーさせてかわす。
セリカが「きゃっ！」と声をあげた。
「セリカ……!?」通信ごしに届いた悲鳴に、思わずヨシは鋒（きっさき）を止めた。その隙に、「んのぉ！」と、ジム・タービュレンスがランドセルのスラスターをマックス・パワーに吹かしてジャンプした、
「こんどはこっちが上をとったとか！」

←↑左上がウェイブライダー、右上がウェイブシューター、下がPBWSが装備されたウェイブダイバー形態。

蕎麦屋「三木亭」の主人であるヨシが製作したガンプラ。ゼータプラスをベースに改修が加えられた大出力重攻撃強襲形態。PBWSが用意されており、飛行形態だけでも、フライングアーマーを用いた「ウェイブライダー」、ウィングバインダーを用いた大気圏突入仕様「ウェイブシューター」、PBWSを活かした「ウェイブダイバー」の3バージョンの切り替えが可能。飛行形態による機動性能は圧倒的で、加速力や急制動にも対応する。主武装はハイパー・メガ・ランチャー、ビームスマートガン。

三木亭は渡さない……
そして、
セリカも渡さない！

Episode 1-C

Episode 1-C

ヨシが、最も配達が困難な出前先に
向かう時に使う……
『ウェイブダイバー』！

よっぽど精度高く造り込んだガンプラじゃなきゃ、あんなにスムーズな変形ギミック、再現できない！

Episode 1-C

しかし、ヨシのゼータキュアノスもジャンプ、再びウィングダイバーに変形すると、いったん位置をとるべく、場を飛び離れようとした。

ところがなにやら加速が鈍い。ジム・タービュレンスのビーム・ライフルをテールに2、3発は食らっただろうか、それでもなんとか飛び去り距離をつくる。

「あいつ、パワーは凄ぇけど、ゴテゴテくっつけてるぶん、重くて鈍くさいんじゃね!?」

ジム・タービュレンスは地に降り立つと、ビルとビルの谷間から飛び出し、超高層ビル群が見下ろす開けた建設現場跡に陣取った。ポリポッドボールもあとに続く。

「最高速は早いけど、加速とかマニューバはいまいちってやつかも！」

「ガンプラはゴテゴテ蕎麦はノビノビ、てめーの時代はどうやら終わったみてぇって感じだなヨシ！」

ジム・タービュレンスがビーム・ライフルを構えた。

「おとなしくセリカちゃんと店をボクたちに、ユー！　渡しちゃいなよ！」

ポリポッドボールまでが、およそ対空火器としてふさわしくない180㎜キャノン砲を構える。

射線の先から、再びヨシのウェイブダイバーが突っこんで来る――そのコクピットでヨシは、グッと表情を鋭くした。

「なら、俺の本気……ぶつけてやるさ！」

ウェイブダイバーが、フライングアーマーをパージし、形態をウェイブシューターにシフトした。とたんに機動がヒラヒラ空気を切るように軽くなる。

「パーツを捨てた!?」ジムは驚いた。

「マジですか!?」ボールは身を隠そうとした、間に合わない、砲を放つ、ヨシは機敏にかわし突進してくる。

ジムは反射的に背後にポリポッドボールを守ると、夢中でビーム・ライフルを撃ちまくった。その激しい弾幕の間すらも縫って、ウェイブシューターが突進してくる。まるでヨシの想いを熱いプロペラント（推進剤）にしてたぎらせながら。

「ぜんぜんノビノビじゃねぇ……これがあいつの、本気……!?」

ジムは圧倒され、ボールはヨシの覚悟を前に、心の中になにやら火照るものが流れ込んでくるのを感じていた。なんだろう……まるでバトルを通して、ヤツが語りかけてくる。

「けれど……」

ボールは、そしてジムも、何だか不思議な気持ちがした。フライングアーマーは確かにジム・タービュレンスとポリポッドボールに砲口の狙いを定めている。けれどヨシが想いを向けているのは自分たちじゃない……まるで。

ボールの傍らで、セリカの気持ちも動いていた。ジムとボールに伝えなければ、自分がヨシの気持ちを確かめるために二人を利用したと。そして、その目的は、果たされたと……。

ヨシのウェイブシューターは目前に迫っている。セリカを逃がすまいとするかのように、ポリポッドボールの脚を止めようと、ビーム・ライフルをかまえた――その時だった、ウェイブシューターのコクピットに備えられている出前専用電話に、着信があった。

反射的にヨシは受話器を取った。

「はい！　おいしさと宇宙をまごころでつなぐ、ケータリングの三木亭です！」

ヨシはハッとなった。注文は『具材全部乗せコスモ増し増し蕎麦』

それは、店の中でも具材の種類も麺の量も最大で、もっとも手間が掛かる、コスモ（宇宙）増し増しの肩書きに恥じないメニュー。ヨシとセリカの二人が、力を合わせなければ完成しない、一品。

ヨシはゆっくりと受話器を置いた、そして、

「セリカ……お前が必要だ」

ポリポッドボールのコクピットに、ヨシの声が届く。

「お前がいないと……特製ギャラクシー蕎麦の注文が、受けられないだろう」

暫く沈黙があった。

セリカの胸の中で、なにかがプチンと切れた。

その音を、ボールは聞いた気がした。

「セリカ……さん？」

「そっか……私はヨシにとって、ただ特製蕎麦を作る手伝いをするだけの……都合のいい女ってわけね……」

可愛い顔から想像もつかないドスの利いた呟き。ボールは戸惑い、

「い、いや、そうじゃないんじゃない、かな……」

しかし次の瞬間、セリカはヨシに向かって真正面から吠えかかっていた。

「だから聞いたでしょ！　私はボールとジムと一緒にあんたの店を乗っ取って！　ぶっ潰して！　アゲアゲのパーリィショップにするって決めたのよ！」

叫びつつセリカは、ボールからポリポッドボールのコントロール・グリップを奪うと、続けざまにトリガーを引いた。派手に連射された砲弾全発が、

あいつ、パワーは凄ぇけど、ゴテゴテくっつけてるぶん、重くて鈍くさいんじゃね!?

Episode 1-C

すっかり油断していたヨシのウェイブシューターのウィングバインダーに着弾する。

「ええええええーっ！」

揚力と推力を失い墜落する直前、ヨシはウェイブシューターをゼータキュアノスに変形させた。ランドセルのスラスターで制動をかけ両脚で地に降り立つと、ポリポッドボールを睨みつける。まさか信じられはしなかったが、

「じゃ……そいつら二人が言ってたことは……」

「私はもう、あなたの所には帰らない！　あんたの顔なんて見たくもない！」

「い、いや！　やっぱ戻った方が、いいんじゃない、かな！」

ジムは慌てた。どうにも面倒な事態になってきたぞ、いいやそれ以上に――

「違うんだってばヨシ！　聞いてくれ！　なんかオレら、あんたの気持ちにもセリカの気持ちにも全然気づけてなかっただけみたいなんだって！」

ヨシがバトルに込めた気合は、セリカを本気で思っている証だ。

そして、こんな暴挙に出たセリカの想いも当然。

その時、天から更なる機影が舞い降りてきた。それはバトルの冒頭、ジムたちに最初の一撃を放ってきた、

「PBWS！」

ボールは、セリカにそれ以上トリガーを引かせまいと必死にグリップから引き剥がしながら、思わず声に出した。

ジムも、次に起こるなにかに緊張した。

彼らの目前で、ヨシが、ゼータキュアノスをジャンプさせた。空中でPBWSと合体する。両腕にハイパー・メガ・ランチャーの長砲身と勇ましさを形にしたビームスマートガンとを備えたゼータキュアノスの勇姿は、まさに圧巻。

「艦隊戦さなかの艦艇から注文があっても届けられるようにと造り上げた、ゼータキュアノス最終形態……いままでそんな出前はなかったが……愛する三木亭を奪おうとしているお前たちが相手なら、初陣としてふさわしい！」

ゼータキュアノスは再び着地すると、両の砲を同時に発砲した。眼も眩まんばかりの閃光は、あわやジム・タービュレンスとポリポッドボールのぎりぎりをかすめると、背後の高層ビルの一棟に着弾した。

ジムとボールが振り返れば、高層ビルは一瞬にして焼失してしまった。

「待てってば！」

返事の代わりにヨシは次弾の狙いを向ける、発射。今度も間一髪逃れた。

エピソード1にまつわるKEYWORD紹介

GBN……

正式名称は、ガンプラバトルネクサスオンライン。電脳仮想空間「ディメンション」上で様々なミッションが可能となるゲームバトルフォールドである。ジム&ボールのふたりは現在、このGBNからログアウト不可になっており、ログアウトを実現すべくゴールデン・ポリキャップを探している。

ゴールデン・ポリキャップ……

その名の通り、黄金に光り輝くポリキャップのこと。どうやらこのポリキャップを手に入れると、GBNからログアウトが可能になるらしい。入手するためには、広大なGBN内で巡り会えるというレジェンド・ガンプラと戦うことが条件とのこと。

レジェンド・ガンプラ……

ゴールデン・ポリキャップを装着しているというガンプラ。ゴールデン・ポリキャップの効果のほどはさておき、トップクラスのガンプラとそのビルダーにのみ与えられる称号といえる。三木亭のヨシの機体「ゼータキュアノス」を含め、7機のレジェンド・ガンプラがいるとされているが……。

ヨシ……

ゼータキュアノスのビルダーでありダイバー。GBN内で、妹のセリカとともに蕎麦屋「三木亭」を営んでおり、ダイバーたちにケータリングするのが主な仕事。昔は蕎麦がのびないほど超速で配達に来ることで有名だったが、最近はのびのびになっているとの噂。

高層ビルが、さらに一棟消失した。
「ヨシを止めねぇと、そのうちディメンションごとぶっ壊れるかもしんねえぞ！」
ジムが焦ってボールに言う。
「でもどうやって！　ヨシはボクたちの話なんて聞く耳持たないし！　セリカは――」
見れば、餌を狙う野良猫のように、ボールからポリポッドボールのトリガーを奪い返そうとしている。どっちももう、相手の気持ちに耳を塞いでる。目と目を逸らしてしまっている――
ふと、ボールは「だったら！」と、思いついた。ヨシに聞こえないようフォース専用の回線を使い、ジムに向かって、
「時間稼いでほしい！　暫くヨシを引きつけておいて！」
「何する気だ!?」
「いいから！」
「なんだかわかんねぇけどわかった！」
と、ジムは言ったものの、さてどうすれば。
それはヨシも同じだった。セリカは自分に愛想を尽かし、奴らと組んで店を乗っ取るという。それは本当なのか？　いいや、セリカ本人がそうだといったんだ。
――なら、『それ』が俺に見せたかったのは、こんな結末なのか？
思案し、動きをとめた隙をついて、ジム・タービュレンスがビーム・ライフルをはなった。とっさにゼータキュアノスがハイパー・メガ・ランチャーとビームスマートガンを撃つ。かすめただけでジム・タービュレンスは左腕を持っていかれた。
しかし同時にジム・タービュレンスのビーム・ライフルも、ゼータキュアノスと合体したPBWSを貫いていた、爆発が本体を誘爆させる寸前にヨシはそれを切り離した。
続けざまに、ジムは必死にビーム・ライフルをはなつ。
ヨシは、遠くない地面に、先にパージしたフライングアーマーが置かれたままになっているのを見つけた。咄嗟に駆け寄るとゼータキュアノスはそれを天高く投げ上げ、自分も高くジャンプした。空中で合体する。再びウェイブダイバーに形態をシフトすると、優位な上空位置から、ジム・タービュレンスに襲いかかろうとした。
しかし彼は気づいていなかった、その更に上空に、ポリポッドボールの姿があったことを――正確に言えば、上空まで伸びる、高層ビルの屋上に。
雄叫びとともに、ボールは、ウェイブダイバーに向かってポリポッドボールをダイブさせると、急いで後部ハッチを開いた。
セリカが驚く。
そんな彼女を、ボールは、思いっきり空に向かって突き落とした。
「え？」
何が起こったのかわからなかった。
気づけば目の前に、ウェイブダイバーがいる。そのハッチが開いた。
気がついた時にはヨシも、夢中で大空の中にダイブしていた。
風切り音の中に、セリカはヨシが自分を呼ぶ声を、ヨシはセリカが自分を呼ぶ声を聞いた。互いが互いを求めて腕を伸ばし、手を重ね指を絡ませ、身をたぐり寄せ、強く抱きしめ合った。ジャンプしたジム・タービュレンスが、無事だった大きな右手で、二人を優しくつつみこみ、そして再び地に降り立った。
どうしてと聞きたいことは、なぜと問いたい想いはたくさんあった。けれど……抱きしめたセリカは柔らかく暖かかった。ヨシは力強く優しかった。
二人とも、それで十分だった。

＊

ゼータキュアノスとのバトルで左腕を失ったジム・タービュレンスと、墜落してボロボロになったポリポッドボールを背に、ジムとボールが、バツ悪そうに笑んでいる。
「やっぱ二人あっての三木亭だね」
ボールが言うと、
「適当言ってるし」
セリカはゼータキュアノスを背に、微笑むヨシと寄り添いながら、目尻に小さく皺を寄せ苦笑した。
「でも嫌いじゃない。いい男よふたりとも。私なんかにコロッといってるなんてもったいない。もっと可愛い女子ダイバー紹介してあげるから」
「うそ？　いつ？　いま？」
目を輝かせ声を合わせるジムとボールに、セリカはウィンクして、
「そのうち」
「やっぱセリカちゃん大好き！」
おおきく腕を開いてハグしようとしたジムを、セリカが一歩退いてかわす。かわりにヨシがジムの前に出た。彼はしばしジムと見つめ合い、ハグの代わりに拳と拳をコツンと重ね、そして、ボールとも重ねた。
セリカが微笑ましそうに見つめる。
「そういえば――」
ふと、問おうとしたボールの言葉を、
「俺が、何に魅せられてたか、だろ？」
と、ヨシは継ぎ、ポケットから『それ』を掴んだ手を出した、開いて見せる。
「金色の……ポリキャップ！」
ジムとボールは身を乗り出した。目を凝らす。
「いつだったか、蕎麦のケータリングの途中に――」ヨシは、その不思議な光景を、いまでもはっきりと憶えている。「いきなり、目が眩むほどの輝きに包まれたことがあった。眩しいのに、目が閉じられない、目を閉じていないのに、なにも見えない。そんな中で声が聞こえた。このゴールデン・ポリキャップは、お前を正しき道に導いてくれる……と。俺は待った。だが、それがセリカを誤解させてしまった」
ヨシはセリカを見た。
セリカは小さくうなずいた。
「だがこうして俺は、本当に大切なものに気づくことができた……ゴールデン・ポリキャップのおかげでお前たちと深く出会い、そして、お前たちが導いてくれた……ありがとう」
ヨシは、ゴールデン・ポリキャップを、ジムとボールに差し出した。
「え？」と、ふたりはヨシを見た。
「次は、きっと、お前たちの番だ」
ジムとボールは顔を見合った。ボールがうなずく。ジムはそれを受けとった。
次の瞬間、眩い輝きが二人を包み始めた。どこから照らしているのかわからない。
「ひょっとしてこれ……GBNからログアウト!?」
ボールが気づいた。
「待った待った待った！　まだ可愛いダイバー紹介してもらってないって！」
慌てるジムに、セリカがバイバイと手を振る。
ボールはハッと思い出した。
「じゃ、ヨシ、あんたが……レジェンド・ガンプラの作り手だったのか？」
「レジェンド？　……さあな。だが、輝きの中でその声は言ってた。俺と同

⬇ビルとビルの谷間でゼータキュアノスを挟撃することで、その優れた機動性能を無効化しようとしたジムとボール。だが、ゼータキュアノスの精密な構造はふたりの想像を遥かに超えたものであった――。

GUNDAM BUILD DIVERS GIMM & BALL'S WORLD CHALLENGE

Episode 1-C

黄金に輝くポリキャップを授かったダイバーが、GBNのなかにあと、6人いるって

じように、黄金に輝くポリキャップを授かったダイバーが、ＧＢＮのなかにあと、６人いるって」

＊

輝きが消え、ジムとボールは気づけば、ガンダムベースのログインブースに並び座っていた。しばらくぼんやりしたあと、同じタイミングでヘッドギアを脱いで――「そうだ」とジムは、手のひらを開いた。

なにも握っていない。

まるで夢を見ていたようにひらいたままの手を眺める。

隣に座っているボールが、「ねぇ」と声を掛けた、振り向く。ボールがなにかを見つめている。視線の先に目をやると、ダイバーギアに置かれたＭＧジム・タービュレンスの脚もとに、ゴールデン・ポリキャップがあった。

再び沈黙の時間があった。

「もしこいつがなかったら――」ボールは口を開いた「『闇金型マフィア』の陰謀で、ボクらずっとＧＢＮに閉じ込められたままだったんだよね」

「みたいだな」

「どうしてゴールデン・ポリキャップのおかげで、ログアウト出来たのかな」

「さあな」

「これって、なんなんだろうね」

「……」

「どうする？」ボールはジムに視線をやった「次またログインしたら、今度はどんなヤバいことに襲われるかわからない……もうやめる？　ＧＢＮ」

「冗談」ジムもボールの方を向いた「ヨシが言ってたじゃん、あいつみたいなレジェンド・ガンプラが、あと６機もいるらしい……ってことは」

ジムはわくわくと笑みを浮かべた。

「まだまだ、レッツパーリィ出来るって事だろ！」

「だよね！」

ボールも笑みをかえす。

ふとジムは、ＭＧジム・タービュレンスに視線を戻した。ゼータキュアノスとのバトルを思い返す。

今日はたまたま生き延びた、けど――

「パーリィをサイコーに盛り上げるには……」

呟く声に、ボールはジムを見た。

「サイコーにダンスが上手いガンプラが必要だぜ」

ジムの口元が、たくらむような悪戯顔で微笑んだ。

ゴールデン・ポリキャップを入手できれば、
GBNからログアウトが可能と知ったジムとボール。
レジェンド・ガンプラに遭遇すべく、ふたりは
再びGBNに潜入することを決意する。
そしてジムは、
ジム・タービュレンスに代わる
新たな機体を完成させる！

次回 NEXT Episode 2